

シダーシンク法を活用した牛の生産性向上の取組と効果

丹後家畜保健衛生所

○坂田貴洋 田中義信 岩本尚史

5 【背景】稲作兼業酪農場では、農繁期に十分な発情観察時間が取れず分娩間隔が延長しが
ちにある。今回、人工授精率および受胎率向上を目的とした腔内留置型プロジェステロン
製剤併用の定時人工授精プログラム（以下、シダーシンク法）を実施し、その効果を検証
した。【材料および方法】管内搾乳牛 30 頭規模の稲作兼業農家 1 農場において試験を実施。
明瞭な発情徴候または発情周期を示さないためシダーシンク法を実施しその後受胎した
10 17 頭を試験区、また、同期間中にシダーシンク法以外で人工授精し受胎した 7 頭を対象区
として、両区間における総授精回数、空胎日数および分娩間隔について比較した。また、
試験区 17 頭において、シダーシンク法の授精日を 0 日として、その後の受胎までの授精日
の日数についても調査した。【結果】両区間において有意差は認められなかったものの、
総授精回数は 0.04 回（試験区 3.26 回：対照区 3.3 回、以下同様）、空胎日数は 33.3 日（231.1
15 日：264.4 日）、分娩間隔は 51.7 日（518.9 日：570.6 日）短縮した。また、シダーシン
ク処置後、平均 49.4 日で授精し、その授精で受胎した。【まとめ】今回の試験では、低
BCS や出荷乳量高、卵巣疾患などの母牛の状態にかかわらず、処置後速やかに受胎に至っ
た。このため農繁期などの人手不足で発情を見逃しがちな酪農場においては、本法は有効
な手段の一つとなりうる。